
ウッタルプラデーシュ州のアンベードカル仏教（1951～2001 年） 人口統計的・社会経済的発展の分析

ジャワーハルラール・ネルー大学
シヴ・シャンカル・ダース*

【要旨】

ウッタルプラデーシュ州のアンベードカル仏教徒は、アウトカーストの改宗やその他の二次的な理由により、この 50 年間（1951～2001）で、他のあらゆる宗教コミュニティを凌ぐ比類ない増加率を見せている。統計データは僅少であるものの、彼らの社会経済状態は、他の宗教コミュニティと同等とは言えないものの、指定カースト／アウトカーストに比べると、識字率、男女人口比、耕作者の割合という点において、若干優れている。国の機関は、彼らの社会経済状態のデータを集めることに消極的である。1990 年代の 10 年間で、政治の分野においても彼らの影響力は大きくなり、その後も発展し続けている。全体として、アンベードカル仏教徒は、ウッタルプラデーシュ州の大衆社会党の政治的言説において、強い訴求力と重要性を有する。現代の大衆社会党政策は単にダリット政策と見ることはできないのであって、実際的に仏教徒によって主導されているのである。

現代インドにおける仏教の熱烈な唱導者であるビームラーオ・ラームジー・アンベードカル博士（Dr. Bhim Rao Ramji Ambedkar: 1891～1956）は、インド全土にわたる仏教復興の波を引き起こした。1935 年のイエオラの大会（ナーシク）で演説に立ったアンベードカルは、自分はヒンドゥー教徒として生まれたがヒンドゥー教徒として死ぬつもりはないと宣言した¹⁾。1956 年 10 月、ゴータマ・ブッダの生誕 2500 年に際し、彼はその約束を果たすべく、ダンマ・ディークシャー（*Dhamma Deeksha*：仏教改宗儀式）という式典で、ナーグプル（マハーラーシュトラ州）の何百万という彼の支持者とともに仏教への入信を誓った²⁾。世界中のあらゆる宗教を学んだ彼は、被差別民の解放のためには仏教が最善の選択であると考えた。最終的に、不可触民の宗教的ジレンマは、1956 年に彼が 22 の誓約とともに仏教入信の決意をしたことにより解決された。アンベードカルは被差別民を啓蒙するにあたり、彼らに、かつてのインドが平等を前提とする仏教の豊かな文化史を礎に光栄ある平等主義的社会を築いていたと論じた。それは、階層的なカースト制に基づく既存のバラモン教的社会秩序の動態とは実に対照的なものであった。1956 年 5 月 24 日にアンベードカルは、同年 10 月に仏教改宗を誓う前のボンベイでの初めての公開宣言の場で、神、靈魂、カースト制という観点から、仏教とヒンドゥー教の中核的な違いを簡潔に説明した。彼は次のように述べた。「ヒンドゥー教は神の存在を信じる。仏教には神はいない。ヒンドゥー教は霊

魂の存在を信じる。仏教の教えに靈魂はない。ヒンドゥー教は四姓制度（チャトゥル・ヴァルナ）とカースト制を信じる。仏教にはカースト制や四姓制度の入る余地はない。」³⁾

アンベードカルにとって、インドの政治体制がうまく運ぶためには、ただ機能を果たす政府があることではなく、支え合う生き方、カーストや階級の無い社会という仏教思想が不可欠であった。彼の言葉を引用すると、「民主主義の本質は政府や議会といった形で存在するのではない。民主主義とは、政府に留まる問題ではないのだ。それは元来、支え合う生き方という形で存在する。民主主義の本質は、社会的結びつき——社会を構成する人々の支え合う生き方という点——に見出されるべきだ。」⁴⁾このように、彼の見方では、民主主義と仏教は互いに補い合うものなのである⁵⁾。

アンベードカルの改宗により、インド全土で夥しい数のカースト被差別民がヒンドゥー教から脱し、仏教を信奉しはじめたことを、統計データは示している。インドの仏教徒は1671%と驚異的に増加、人数にすると180,823人から1961年の統計で3,250,227人に増加したが、これは世界のいかなる宗教史上にも見られない現象であった⁶⁾。現代インドの著名な仏教学者D. C. Ahirによると、1956年以降は、激動をともなう仏教復興の時代であり、「インド仏教のアンベードカル時代」と呼ぶにふさわしいと言う⁷⁾。これは「アンベードカル」の名を前につけずに現代インドの仏教を社会学的に研究することはできない、ということの意味する⁸⁾。しかしながら統計では、アンベードカル仏教や新仏教ではなく単に「仏教」として記述されているため、本稿で統計データを扱う時には「仏教」というカテゴリーを使用している。

ウッタラプラデーシュはインドで最も人口の多い州であり、インド国家体制において重要な地域である。世界の人口データによると、41人に1人がウッタラプラデーシュに住んでいることになる。2001年の統計を見ると、166,197,921人というウッタラプラデーシュの人口は、中国、アメリカ合衆国、インドネシア、ブラジル、ロシアを除いた世界の多くの国を上回っている⁹⁾。このような膨大な人口の22%を指定カーストが占めている（2001年統計）。ウッタラプラデーシュは、インドで2番目に高い経済力を持つ州でもあり、2004年から2009年のインドの総GDPの8.17%を占める¹⁰⁾。インドの政治において、改宗はいつの時代も重大な事柄であり、紛争と暴力を伴ってきた。宗教的アイデンティティーの転換は、たびたび政治論争を引き起こしてきた。ある集団がアイデンティティーを変えると、あるコミュニティの人数が増減することになり、それは民主主義において非常に重要なことなのである。

古くから、指定カースト（かつては不可触民として扱われた）は、ウッタラプラデーシュにおいて社会・経済状態という点で最も後進的なコミュニティであった。そうした悲惨な状況を打破するため、時に彼らは支配的なヒンドゥー的社会秩序に異議を唱えてきた。カビール（Kabir）、ラヴィダース（Ravidas）、アチュタナンダ（Achhutanand）などは、何百年もの間、恵まれない人々の声の象徴であった。現代になって、彼らに続くひとりの英雄が現れた。それは憲法、社会、文化、政治の面で彼らの権利のために闘った、アンベードカル博士である。アンベードカルの理想とビジョンは、社会的に軽視され、政治的に服従させられ、文化的に破壊され、経済的に搾取されている人々に権利を与えるために、非常に重要である。周知のとおり、アンベードカルのビジョンのひとつは、被差別民に権利を与え、インドをPrabuddha Bharat（覚醒したインド）——自由、平等、友愛、公平という仏

教の価値観が広く行きわたる国——に変えることであった。1956 年の仏教への改宗運動は、まさにそういった目標に向けての動きであった。アンベードカルの理念に対する敬意は、仏教徒人口の増加に如実に表れている。ウッタルプラデーシュでは、アンベードカル博士と仏教を前面に押し出さなければ、いかなる政治も成立し得ないだろう。

1. ウッタルプラデーシュにおける仏教徒の人口統計的發展

現在のウッタルプラデーシュの境界にもとづけば、1951 年の統計では総仏教徒数は 2,517 人であった。当時、ウッタルプラデーシュの 12 の県で仏教徒はゼロ、13 の県で 2 桁以下であり、この 4 桁の数字は 46 の県の合計であった。しかし、その後の統計では毎回、著しい増加を見せている。

Table 1. Composition of Uttar Pradesh Population

Census Year	Total Population	Buddhists
1951	60693755	2517
1961	70640045	10478
1971	84539184	35056
1981	106016301	47573
1991	132061753	208583
2001	166197921	302031

Source: Census of India data on Uttar Pradesh 1951-2001.

Table 2. Buddhist Population Growth 1951-2001 Area-wise

Area/Division	1951-1961	1961-1971	1971-1981	1981-1991	1991-2001
Agra	4576	11343	17109	43044	60624
Allahabad	860	5130	4822	11915	23924
Banaras	553	580	1816	20358	34988
Faizabad	111	103	404	12594	23570
Gorakhpur	202	289	1302	37768	58724
Jhansi	188	1847	1919	12327	7568
Lucknow	350	1708	10139	37422	48512
Merrut	2464	11819	7365	17664	16448
Rohilkhand	1174	2327	2697	15491	27673
Total	10478	35146	47573	208583	302031

Sources: Census data on Uttar Pradesh 1951-2001.

周知のとおり、ウッタルプラデーシュの地理的境界は数回の変更を経ている。例えば、2000 年にウッタランチャルが切り離されたため、その地理的領域分の人口を、2000 年以降だけではなく 1951 年からずっと差し引いてあり、現在の地理的領域だけを考慮に入れて表示ならびに分析している。1951 年にあった地域区分をベースにして、のちに作られた地域

区分はそこに組み入れられている。仏教徒数の増加を詳細に研究するには、統計に沿って研究するべきであろう。

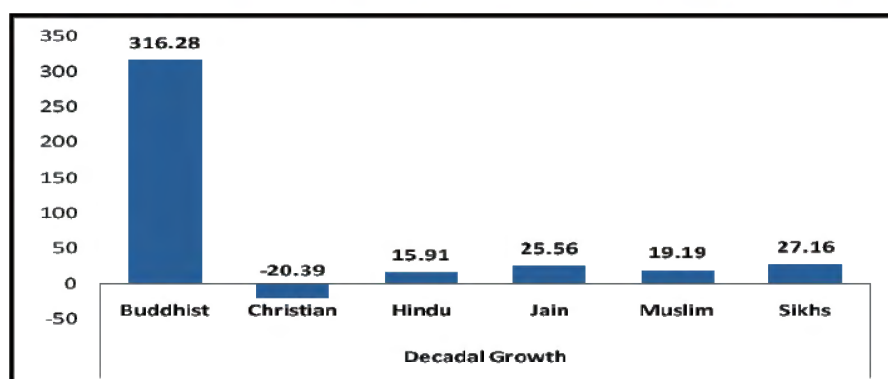
1.1 統計 1961

ウッタルプラデーシュはインド古代史における仏教発祥の地である。支配層および大衆の宗教であった仏教は、その誕生の地から衰退してゆき、1951年にはわずか2517人（州人口の0.004%）まで減少した。1950年代の仏教復興を見るまでは、主要な12県で完全に絶えてしまっていた¹¹⁾。

ウッタルプラデーシュ東部の諸県は、かつて仏教の中心地であったが、6世紀以降に政治的保護を奪われたことや¹²⁾、バラモン教との対立といった悪条件により、その魅力を失った。マウリヤ朝やクシャーナ朝の時代に仏教の美術・文化は全盛を極めたものの、20世紀までには最低レベルまで衰退した。中国の学僧、玄奘は、7世紀にインドを訪れた際に目にした魅惑的な仏教文化を描写している。彼によると、仏教の美術と建築を象徴する30の僧院と多くの仏塔があった。サールナート（鹿野苑）とシュラーヴァスティー（舎衛城）は、ウッタルプラデーシュの仏教徒のみならず、世界中の仏教徒からも崇敬を集める場所である。また、ウッタルプラデーシュを5世紀初頭に訪れた中国人巡礼者の法顕（Fa-hian）や、7世紀末に訪れた義浄は、当時目にした仏教の記念物の数々を紹介している¹³⁾。

仏教徒人口の大幅な増加が最初に見られたのは1961年の統計であり、とりわけアグラ（Agra）、メーラト（Meerut）、アリーガル（Aligarh）、バレーリ（Bareilly）、ビジノール（Bijnor）、ピーリービート（Pilibhit）といったウッタルプラデーシュ西部の県において顕著であった。他にも集団改宗が見られた重要な地域は、カーンプル（Kanpur）、ラクナウ（Lucknow）、ミルザプール（Mirzapur）である。その後、ウッタルプラデーシュ全域で仏教徒人口の急増が記録された。1951年にゼロだった12の県のうち8県においても、その後の統計で多数の仏教徒人口が記録された。これにより、仏教の勢いは特定の地域に限られたものではなく、あらゆるところにその影響が及んだことがわかる。

Figure 1. Growth Rate of Religious Communities in U.P (Census 1961)



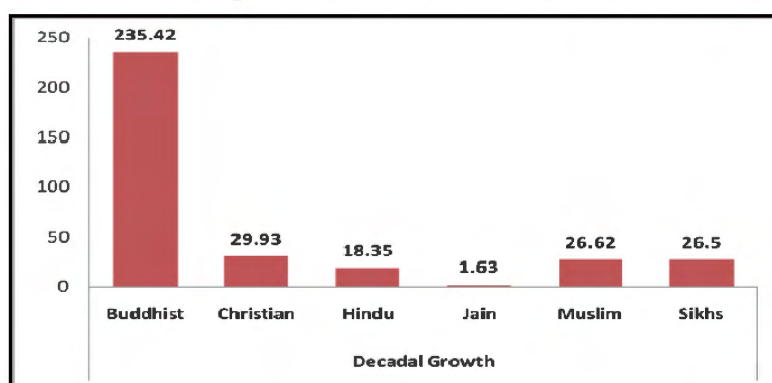
Sources: Census of India 1951 and 1961

1961 年の統計では、仏教徒数は 4 倍に増えて 10,478 人（ウッタルプラデーシュ総人口の 0.014%）となり、全体の増加率が 16.38%であったのに対して 316.28%という驚異的な増加率を示した。こうした仏教徒数の目覚ましい増加は、キリスト教徒（-20.39%）、ヒンドゥー教徒（15.91%）、ジャイナ教徒（25.56%）、イスラム教徒（19.19%）、シク教徒（27.16%）など他のすべての宗教を凌いでいた。ヒンドゥー教徒とキリスト教徒においては、その 10 年間の平均的な増加率（16.38%）にさえ満たなかった。

1.2 統計 1971

1971 年の統計では再び仏教徒の急増が見られた。この 10 年間で仏教徒人口の増加率は 235.42%、一方、総人口の増加率はわずか 19.64%であった。仏教徒数は前回の統計の 10,478 人から 35,056 人へと跳ね上がった。1971 年の統計における仏教の発展に関してさらに注目すべきことは、古くから仏教の中心地であったウッタルプラデーシュ東部に代わり、西部および中部において仏教の人気と改宗が増加したことである。ベナレス（Banaras）、クシナガラ（Kushinagar）、シュラーヴァスティー（Shravasti）といった古くから有名な仏教の中心地では、州西部で起こったような目覚ましい仏教復興の波がなかった。1971 年の統計で仏教徒人口が驚異的に増加した行政区画は、アールグラー（11,343 人）、メーラト（11,739 人）、アラーハーバード（5,130 人）、ロヒルカンド（2,327 人）、ジャーンシー（1,847 人）、ラクナウ（1,708 人）であり、一方、ベナレス（580 人）、ゴーラクプル（289 人）、ファイザーバード（103 人）といったウッタルプラデーシュ東部の県は、千の位にさえ届かなかった。

Figure 2. Growth Rate of Religious Communities of Uttar Pradesh in % (Census 1971)

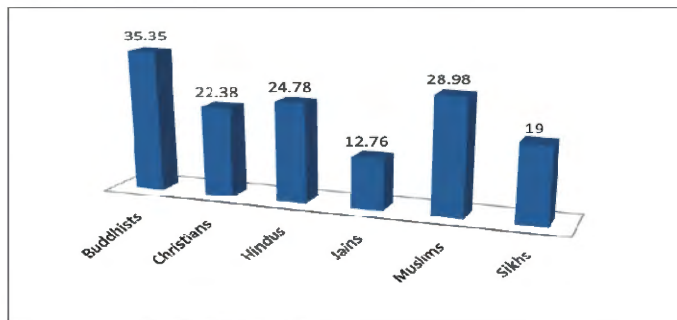


Sources: Census of India 1961 and 1971.

1.3 統計 1981

1981 年の統計を見ると、仏教徒数は、1961 年統計での仏教復興以来、最も緩慢な増加率（35.35%）を示した。それでも他の宗教コミュニティに比べると、その増加率は他のすべての宗教、すなわちキリスト教徒（22.38%）、ヒンドゥー教徒（24.78%）、ジャイナ教徒（12.76%）、イスラム教徒（29.28%）、シク教徒（19.00%）を上回っていた。

Figure 3. Growth Rate of Major Religious Communities of Uttar Pradesh in % (Census 1981)



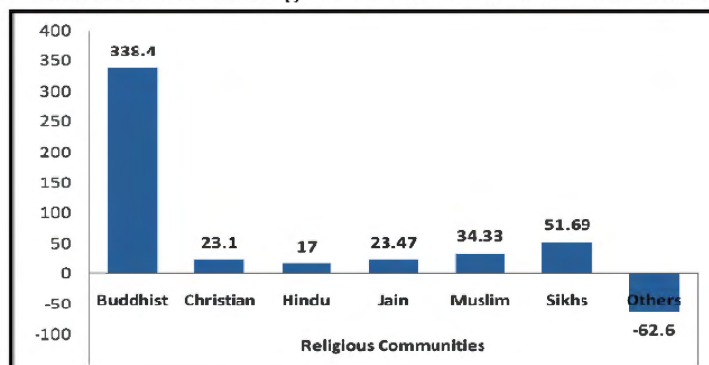
Sources: Census of India 1971 and 1981

前回の統計で増加が緩慢だったウッタールプラデーシュ東部の行政区画が、この10年間で著しい増加を示した。ベナレス、ゴークラプル、ラクナウ、ファイザーバードといった地域が、それぞれ1,816人、1,302人、10,139人、404人というこれまでにない高みに達した。ベナレス、ゴークラプル、ラクナウ、ファイザーバードのこの10年間の増加率は、それぞれ213.10%、350.51%、493.61%、292.23%である。ウッタールプラデーシュ西部ではアーグラだけが50.83%と、西部地域の中では比較的良好な増加率を維持した（10年間の州全体の仏教徒数の増加率は35.51%）。仏教徒数の増加率が極めて小さかった行政区画はロヒルカンド（15.90%）、ジャーンシー（3.89%）である。メーラトとアラーハーバードでは増加率がマイナスとなり、それぞれ-37.26%、-6.00%であった。

1.4 統計 1991

1991年の統計では仏教徒人口が目覚ましく増加した。ウッタールプラデーシュにおける現代の仏教復興史上、1991年の統計は338.44%という最大の仏教徒数増加率を記録し、一方、ヒンドゥー教徒の増加率は、17.03%と再びどん底に落ちた（総人口の増加率は24.56%）。ウッタールプラデーシュの全地域の仏教徒数の増加率¹⁴⁾を、高い順に挙げると、ファイザーバード3017.32%、ゴークラプル2800.76%、ベナレス1021.03%、ジャーンシー542.36%、ロヒルカンド474.37%、ラクナウ269.08%、アーグラ151.58%、アラーハーバード147.09%、メーラト139.83%であった。

Figure 4. Growth Rates of Religious Communities of Uttar Pradesh (Census 1991)



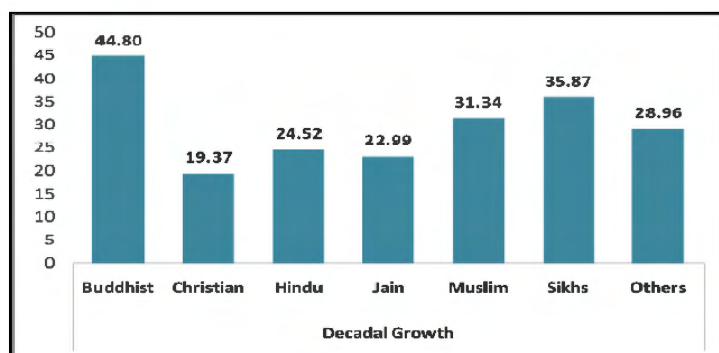
Source: Census of India 1981 and 1991

上図（Figure 4）を見ると、仏教徒の目覚ましい垂直的な増加率（338%）は、他のすべての宗教、すなわちヒンドゥー教徒（17%）、イスラム教徒（34%）、ジャイナ教徒（23%）、キリスト教徒（23%）、シク教徒（51%）を大きく引き離していることがわかる。

1.5 統計 2001

20 世紀最後の 10 年間、ウッタルプラデーシュの平均的な人口増加率は 25.84%であり、一方、仏教徒人口の増加率は 44.80%と、すべての宗教コミュニティの中で最大であった。

Figure 5. Decadal Growth Rate of Religious Communities of Uttar Pradesh in% (Census 2001)



Sources: Census of India 1991 and 2001.

仏教徒の増加率が前回の統計で見られたほどではないことは事実であるが、その数は明らかに増加しており、その著しい重要性は確かである。その 10 年間で平均的な増加率の 25.84% にさえ届かなかった宗教は、ヒンドゥー教徒 24.5%、ジャイナ教徒 22.9%、キリスト教徒 19.3%である。アラーハーバードは 100.78%と、最大の仏教徒増加率を記録したのに対し、同地のヒンドゥー教徒の増加率は 24.5%に留まった。他にファイザーバード、ロヒルカンド、ゴラクプルといった地域の仏教徒の増加率は、それぞれ 87.15%、78.63%、55.48%であった。仏教徒数の詳細については既出の Table 2 を参照されたい。

全体的な仏教徒数の増加率を下回った地域は、アグラ（40.84%）、ラクナウ（29.63%）、メーラト（6.88%）であった。ジャーンシーでは仏教徒数の増加率が-36.80%と、マイナスであった。これはジャーラウン県で仏教徒数が 5447 人減少したことによるが、その原因は未だに不明である。メーラトでは、メーラト県で仏教徒数が 5012 人減少した。これらマイナスの数字を除けば、2001 年統計のウッタルプラデーシュにおける仏教徒数の急増が新たな頂点に達したことは否めない。

2001 年の統計を見ると、ウッタルプラデーシュの仏教徒数は、1951 年の 2,517 人から 302,031 人に増え、11,899%という先例を見ない増加を示したことになる。1951 年～2001 年の平均的な仏教徒増加率は 194.36%であり、わずか 22.37%という人口の平均的な増加率に比べて驚くべき差をつけた¹⁵⁾。その 50 年間の平均的な仏教徒増加率は他のすべての宗教を大

差で上回っており、ヒन्दゥー教徒 61.92%、イスラム教徒 71.56%、キリスト教徒 48.31%、ジャイナ教徒 54.82%、シク教徒 77.79%であった。このような驚くべき増加率の傾向は、仏教が人々にとって非常に重要なものであり、民主主義政治においてこの現象を無視することはできないということを示している。

2. ウットルプラデーシュの仏教徒の社会指標

インドの 2001 年の統計は、宗教コミュニティ別の男女人口比や識字率などの特定の側面を浮き彫りにしている。仏教徒コミュニティの識字率は、イスラム教徒を除けば、全ての宗教コミュニティの中で最下位に位置してはいるものの、指定カーストのそれよりも上である。高等教育への仏教徒の参加といった、他の側面については、統計データでも全国標本調査機構（National Sample Survey Organisation: NSSO）などでも得られない。他に役立つ有意義なデータとして全国家庭保健調査（National Family Health Survey: NFHS）があるが、これも州レベルのデータは得られない。このように判断材料が少ないことから、ここでは仏教徒の最も重要な側面のみに光を当てることにする。すなわち「識字率」であり、これは 2001 年の統計に示されている。

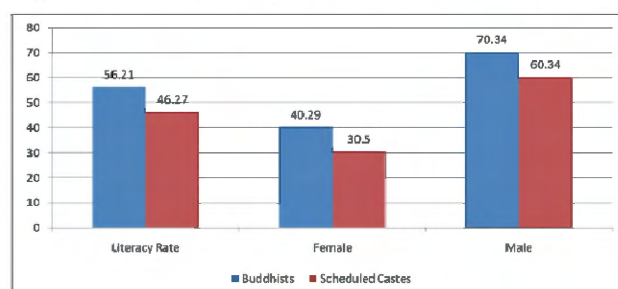
識字率： 独立後のインドで、統計当局が宗教別の識字率に関するデータを発表したのは 2001 年が初めてである。識字率は社会および人間の発展を表す重要な指標であり、出生率の他、死亡率——特に子どもの死亡率（男女人口比）——に直接影響する。仏教は指定カーストの大規模な改宗により最も大きく成長した宗教であるため、仏教徒の識字率は指定カーストよりも高い。とはいえ、他の宗教に比べると遅れている。下記 Table 3 と Figure 6 はその点を明確に示している。

Table 3. Literacy Rate of the Religious Communities of U.P in %

Religious Communities	% Literacy
Buddhists	56.2
Christians	72.8
Hindus	58.0
Jains	93.2
Muslims	47.8
Sikhs	71.9
All	56.3

Source: Census of India 2001

Figure 6. Literacy Rate of Buddhists and Scheduled Castes of Uttar Pradesh in %



Source: Census of India 2001

Table 3 から、仏教徒の識字率（56.2%）はイスラム教徒（47.8%）と比べた場合のみ上回っており、それ以外の宗教コミュニティ、すなわちジャイナ教徒（93.2%）、キリスト教徒（72.8%）、シク教徒（71.9%）、ヒンドゥー教徒（58.0%）の識字率の高さがわかる。Figure 6 を見ると、指定カーストの識字率は 46.27%であり、仏教徒の識字率のほうが 56.21%と、上回っている。

3. ウットルプラデーシュの仏教徒の経済状態

経済状態は、人間の生存に関する最も重要な変数のひとつである。経済基盤が健全なコミュニティは、政治や高等教育などの分野において常に優位に立つ。あるコミュニティの経済特性は、人々が携わっている経済部門、彼らの労働の性質、雇用者が被雇用者か自営業者かといった雇用状態、収入の状態に基づいて計算される。こうした観点から、他と比較した仏教徒コミュニティの経済状態を把握するため、以下の要素を取り上げることにする。

労働者の活動形態： 労働者の業種は、主に第一次産業部門、第二次産業部門、第三次産業部門の 3 つの部門に分けられる。この分類法にもとづき、特定のコミュニティの労働の専門化および多様化の程度を分析することができる。これは経済学者にも経済的進歩の指標として用いられている。2001 年の統計は、耕作者、農業労働者、家内産業労働者、その他の労働者といった部門毎の労働者のデータを宗教別に提供している。それを下記 Table 4 に示す。

Table 4. Distribution of Category of Workers by Religious Communities of Uttar Pradesh in%

Category	Buddhist	Christian	Hindu	Jain	Muslim	Sikhs
CL	41.0	14.8	44.2	5.0	25.7	51.3
AL	35.4	13.1	25.6	1.9	21.6	9.1
HHI	3.1	5.0	4.4	5.9	11.9	3.4
Others	20.5	67.1	25.9	87.2	40.7	36.2

Source: The First Report on Religion Data- Abstract, Census of India, 2001.

略語：

CL＝耕作者（Cultivators）。政府、民間団体や他の団体が所有または占有する土地の耕作に従事する。

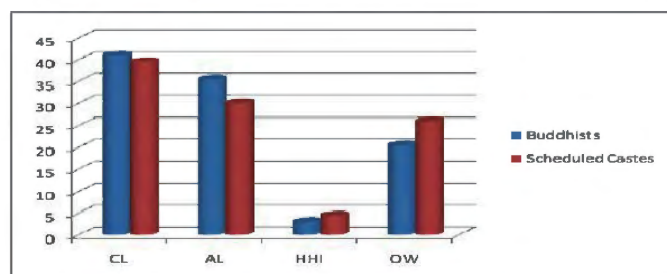
AL＝農業労働者（Agricultural Labourers）。他人の土地で働いて金銭または現物で報酬を得る。

HHI＝家内産業労働者（Household Industry Workers）。1 人またはそれ以上の家族が自宅または農村部集落内で経営する産業。

OW＝その他の労働者（Other Workers）。過去 1 年間に於いて公務員、鉱業、建設、社会・政治業務、教員、通商、商業などの何らかの経済活動に従事している。

Table 4 を見ると、仏教徒の労働者は、主に耕作者（41.0%）、農業労働者（35.4%）、その他の労働者（20.5%）として従事している。上表で注目すべきことのひとつとして、仏教徒で農業労働に従事している労働者の割合は他のどの宗教よりも高いことが挙げられ、ヒンドゥー教徒は 25.6%、イスラム教徒 21.6%、キリスト教徒 13.1%、シク教徒 9.1%、ジャイナ教徒 1.9%となっている。このことから、仏教徒の第一次産業部門の参加率は最も高いと言える。

Figure 7. Categories of Workers- Scheduled Castes and Buddhists in Census 2001



Source: State Primary Census Abstract for Individual Scheduled Caste and the First Report on Religion Data Abstract, Census of India, 2001

仏教徒と他のコミュニティのもう一つの妥当な比較は、指定カーストとの比較である。なぜなら、仏教徒の大半が指定カーストの出身だからである。Figure 7 を見ると、仏教徒の総労働者は主に耕作者（41%）、農業労働者（35.4%）である。指定カーストでは、耕作者の割合は 39.5%、農業労働者は 30 %である。それ以外の 2 つの部門、すなわち HHI と OW については仏教徒よりも指定カーストが高い。指定カーストの HHI および OW の割合は、それぞれ 4.5%、26%、仏教徒はそれぞれ 3.1%、20.5%である。仏教徒コミュニティは主に第一次産業部門、とりわけ耕作（41%）を生業とし、指定カースト（39.5%）のそれをわずかに上回る。この比較調査から、仏教徒は耕作および農業労働の分野において優位であり、一方、家内産業とその他の業種においては下位であることがわかる。

4. 仏教徒の台頭を支える要因

4.1 アウトカーストの改宗

大規模な仏教改宗が確かに存在することを証明するもののひとつは、その大幅な増加比率である。下記 Table 5 を見ると、5 回の統計における総人口の増加率はそれぞれ 16.3、19.6、25.4、24.5、25.8%であるのに対し、仏教徒人口の増加率はそれぞれ 316.2、235.4、35.3、338.4、44.8%となっている。このような仏教徒数の大幅な増加率は、高い出生率と低い死亡率にもとづいて計算されるその内的人口増加率によるものではない。歴史上、このような高い増加率が自然に生じたコミュニティは存在しない。これは間違いなく集団改宗運動、特にアウトカースト／指定カーストの人々の改宗によるものである。

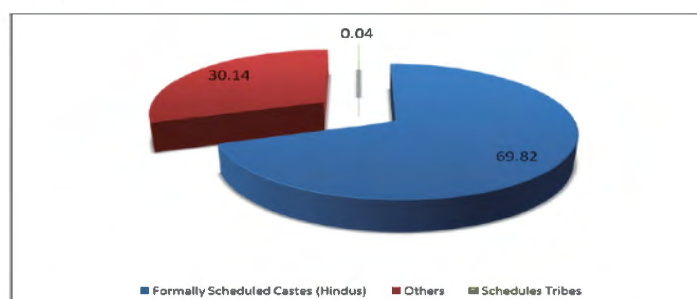
Table 5. Decadal Population Growth Rate of Uttar Pradesh in % (1961-2001)

Growth in %	1961	1971	1981	1991	2001
Buddhists	316.28	235.42	35.35	338.4	44.80
SCs	-----	-----	-----	-----	25.23 ¹⁶⁾
Total Population	16.38	19.67	25.40	24.56	25.84

Sources: Census of India 1951-2001

もうひとつ、仏教徒数の大幅な増加率における最も重要な要因が改宗であることを示すものは、2001 年の統計レポートに示されるとおり、仏教徒人口統計の社会構成である。2001 年統計によると、仏教を信奉する指定カーストの人数は 302,031 人のうち 210,890 人、同州の総仏教徒人口の 69.82%を占めている。

Figure 8. Social Composition of Buddhists Demography in Uttar Pradesh in % (Census 2001)



Sources: Uttar Pradesh The Data Highlights: Scheduled Castes and Scheduled Tribes, Census of India 2001.

Total Number of Buddhists (UP) 2001	Buddhists formerly Hindu SCs	Other Buddhists in 2001	Scheduled Tribes
302031	210890 (69.82%) of total Buddhists	91034 (30.14%) of total Buddhists ¹⁷⁾	107 (0.04%) of total Buddhists

Figure 8 は、アウトカースト／指定カーストが仏教徒人口で最も大きな割合を占めることを裏付けている¹⁸⁾。このデータから、改宗した指定カーストにとって最も魅力的な宗教が何であるかは明らかであり、インド全体の指定カースト総人口の 0.6%、仏教徒総人口の 3.74%を占めている。

1961 年統計の一般報告書も、指定カーストの仏教改宗が仏教徒の飛躍的な増加率における最も可能性の高い要因であると述べている。同報告書によると、「同州の増加率 316.28%という仏教徒人口の拡大に寄与した最も重要な要因は、とりわけヒンドゥー教徒の指定カーストからの大規模な改宗である」とある¹⁹⁾。従って、アウトカーストの改宗という理由が、仏教復興における最も重要な側面だと言える。

4.2 アンベードカルの影響範囲

1956 年のアンベードカルによる改宗の呼びかけは、ウッタルプラデーシュのアウトカースト、とりわけ同州で最多の指定カーストであるジャタヴ (Jatav) の人々の心を動かした。ジャタヴは、アンベードカルを自分たちの文化的英雄として受け入れることでこの歴史的な改宗運動を歓迎し、その結果、幾度も改宗式を主催した。

4.2.1 文化的英雄

アンベードカルが圧倒的に支持された理由は幾つかあるが、第一に文化的な理由が挙げられる。Lynch [1969] によると、文化的要因とはジャタヴの間に受け継がれた文学、神話、芸術、象徴、価値観である。アグラのアウトカーストは、1957 年のアンベードカルが集団改宗運動に賛同し、22 の寺院からヒンドゥーの神々を撤去し、それらの寺院を仏教の寺に変えた²⁰⁾。ラクナウでは、ボーダーナンド (Bodhanand) の後継者であるプラギヤーナンド尊者 (Bhante Pragyand) が、1957 年に何度か仏教改宗式を執り行った²¹⁾。

当初、ウッタルプラデーシュ西部の多くの県 (アグラ、アリーガル、メーラト、पीリーबीト) におけるヒンドゥーの不可触民は、自分たちは仏教徒であると主張し、アンベードカル博士を自分たちの文化的英雄であると断言し始めた。彼らはアンベードカルを英雄として受け入れたが、それは多くの人々にとって意外なことであった。なぜなら、アンベードカルはジャタヴ出身ではなく、マハーラーシュトラ州のマハール (Mahar) というカーストに生まれていたからである。よそ者であるにもかかわらず、アンベードカルは彼らの英雄として受け入れられた。このことは出自の結束力が重要な役割を果たすインドの歴史上、珍しい出来事だと見なす社会学者もいるが、アンベードカルの場合、そういったことは重要ではなく、彼は幅広く受け入れられた。Lynch [1969] は次のように述べている。

彼はジャタヴの文化的英雄になり、彼が集めた注目は崇拝に近い。これは一見、意外なことに思える。なぜなら、アンベードカルはウッタルプラデーシュのジャタヴの出身ではなく、マハーラーシュトラ州のマハールの出身だからである。異なるカースト、異なる出身地という 2 つの要因は、出自の結束力が深く根を張り集団と集団を分断するインドでは、通常、指導者に向かないと判断される根拠になりかねない²²⁾。

4.2.2 経験の共通性

上述の Lynch の言葉は、カーストと出身地という点でウッタルプラデーシュのジャタヴとは異なるアンベードカルが受け入れられたという点をより明確にしている。なぜジャタヴはアンベードカルを自分たちの理想として受け入れたのか。その答えは「経験の共通性」であり、それがアンベードカルとジャタヴの人々を結びつけた主な絆であった。両者ともカーストの階層社会と不可触民制度の犠牲者であり、故に彼らは、自分たちの人生を変えるためにアンベードカル ideal と方法を称賛した。Lynch は次のように論じている。

ジャタヴにアンベードカルを指導者にするという異例の選択をさせた推進力は、多分に彼らの人生とアンベードカル的人生の共通性にある。アンベードカル的人生は、厳

しい現実、複雑な問題、根本的な解決法という、彼ら自身の人生の縮図なのだ。それ故にアンベードカルと自分たちを同視し、カーストと出身地への偏狭なこだわりを超えることは容易であった。〈中略〉ジャタヴは、アンベードカルの経験と自分たちの経験は同じだと感じている。このため、彼らはアンベードカルに従い、自分たちの問題を克服するために彼の方法と理想を受け入れている²³⁾。

Lynch がさらに述べているように、「アンベードカル博士に対するジャタヴの人々の並々ならぬ尊敬の念には幾つかの理由があり、それがアンベードカルを紛れもない英雄として広く受け入れ、彼の仏教解釈を新たなアイデンティティーの立脚点として受け入れることにつながった」²⁴⁾のである。仏教は彼らに、希望の光、まとまった根本的な価値観、理想的な社会モデルを授けた。そして Lynch が主張するように、「それらを現実のものにするため、ジャタヴは政治活動に従事した」²⁵⁾。初めにジャタヴはアンベードカルに連絡を取り、1930～31年にガンディーとアンベードカルの間で激しい論争が起こった2度目の円卓会議の時に、ガンディーに対抗してアンベードカルを支持する電報を何度も送った。ジャタヴはアンベードカルの見解が正しいと感じていた。

もうひとつの理由はアンベードカルの社会構造における地位にある。彼はジャタヴとの共通点、すなわちヒンドゥー教の制度化された社会構造のもとで不可触民であるという共通点を持つ革命家であった。この共通点は、「彼は仲間だ」、インドでたいなる名誉と権力と責任のある地位を獲得したアンベードカルが自分たちの問題と気持ちを身内として本当に理解することのできる人間だ、という思いを強固にした。アンベードカルがジャタヴから圧倒的支持を受けた第四の理由は、象徴としての重要性である。彼の輝かしい功績から生まれたカリスマ的イメージがジャタヴに著しい影響を与えたのである。

4.2.3 伝統の共通性

Lynch [1969&1972]によると、ジャタヴの人々にとって二つの重要な北インドの伝統があるという。すなわち (a) カビール (Kabir) とラヴィダース (Ravidas) という宗教的伝統、そして (b) アルハ (Alha) とウダール (Udal) という英雄的伝統である。いずれの伝統もヒンドゥー教と不可触民制度との闘いの歴史である。宗教的伝統の闘いの中で、カビールとラヴィダースはヒンドゥー教のカースト的側面を否定しており、彼らの教えはアンベードカルのメッセージと非常によく似ている。ふたりの宗教的伝統の体現者はヒンドゥー教を否定し平等を説いた。アンベードカルは、どちらの伝統にも合致する。彼はまずカビールとラヴィダースの伝統を引き継ぐべく、ヒンドゥー教とカースト制に猛烈に反対した。彼はカビールを、ジョーティラーオ・プレー (Jyotirao Phule) やゴータマ・ブッダ (Gautama Buddha) と並ぶ導師のひとりで見なしていた。このため、カビールのような宗教改革者として、彼はジャタヴにすんなり受け入れられた。アンベードカルとジャタヴに共通する英雄観については、アルハとウダール (おそらく不可触民であろう) の英雄的な活躍により証明しようとする試みがなされている。アルハとウダールは、英雄的功績によりプリトヴィーラージ (Prithviraj) との戦争でパルマル (Parmal) 王を助け、不可触民がその心と言葉と行為において偉大な戦士であることを証明した。そういった意味で、ジャタヴは、不可触民制度に対抗するアンベードカルの活動、教育のための彼の闘い、インド憲法の父とし

ての彼の役割には、伝統的英雄であるアルハとウダールに通じるものがあるとしている²⁶⁾。

4.3 社会政治的組織が果たした役割

増加の一方を見せる仏教徒人口ならびにアウトカーストの間での仏教の人気は、彼らにとっての「アンベードカル仏教」の重要性を示している。アンベードカル亡き後、アンベードカル仏教のメッセージが伝えられたのは、インド仏教徒協会 (Bhartiya Baudh Mahasabha または Buddhist Society of India: BSI) やインド共和党 (Republican Party of India: RPI) などのような彼が設立した組織の功績である。BSI は、1955 年 5 月 4 日にアンベードカル博士により、ムンバイの会社登記官事務所にて登記された。この組織はインド全土およびウッタールプラデーシュで積極的に活動した。アーグラがその主な活動拠点であった²⁷⁾。これら組織のリーダーたちは改宗運動に積極的に参加し、アウトカーストを精力的に説得して、古くからの社会的・精神的隷属——改宗により終焉するとアンベードカルが願ったもの——を打破する希望の光としてアンベードカル仏教を信奉させた。

アウトカースト仏教徒が率いた政治団体である RPI は、当時、アンベードカル仏教徒の運動を広く受け入れさせるのに非常に大きな役割を果たした。RPI は、1960 年代以降、「留保制度」をアンベードカル仏教徒（指定カーストまたは指定部族からの改宗者）に拡大することを要求し、党首たちはアウトカーストの仏教改宗を積極的に促進した²⁸⁾。RPI はダリット政治と仏教の結合体の典型例である。このように、仏教の振興において社会政治的組織が果たした役割は極めて大きい。1980 年代、ダリット・パンサー (Dalit Panther) は、刊行物や公開集会を通じてアウトカーストとアンベードカル仏教のための運動を起こす活気ある戦力であった²⁹⁾。

1990 年代の 10 年間は社会的・政治的安定という分野で大きな矛盾が生じた時代である。インド人民党 (Bhartiya Janta Party: BJP) や世界ヒンドゥー協会 (Vishva Hindu Parishad: VHP)、バジラング・ダル (Bajrang Dal) などのヒンドゥットヴァ (Hindutva: ヒンドゥー原理主義) 勢力が、ヒンドゥー教のイデオロギーにもとづいて社会的政治的規範を確立しようとする一方で、ダリットが率いる大衆社会党 (Bahujan Samaj Party: BSP) や社会党 (Samajwadi Party: SP) などの政党が、ダリットや他の後進層の力強い代弁者となった。Bellwinkel [2007] が論じるところによると、ヒンドゥー原理主義団体のサング・パリワール (Sangh Parivar) が主導した政治的言説は何ら影響力を持たず、アンベードカル仏教徒に激しく否定された。

ウッタールプラデーシュの社会政治史上の重要な出来事として、指定カーストを党首とする政党である大衆社会党 (BSP) の台頭がある。Ilaiyah [1994] は、BSP の目標はカースト制を崩壊させ、社会変革をもたらすことであったと述べている³⁰⁾。Pai [2002] によると、「BSP はダリットに社会変革を意識させるのに重大な役割を果たしたが、それを達成し得なかった」。彼女はこうも主張する。「BSP はアイデンティティーと意識覚醒にもとづいて強力なダリット運動を構築したが、その一方で、1980 年代と 1990 年代にウッタールプラデーシュのダリットの政治参加が格段に進んだにもかかわらず、BSP は、マヌヴァーディン (マヌ法典主義者、すなわち、カースト上層民の代表) 勢力を退け、社会変革をもたらすと公言した目標を達成できていない」³¹⁾。つまり彼女の見方では、BSP がもたらしたのは社会変革を伴わないダリットの政治参加のみである。

4.4 チベット移民

1961 年統計の一般報告書³²⁾によると、改宗以外の出来事として、中国によるチベット占領後、ダライラマがインドに政治的亡命を求めた 1959 年に、大勢のチベット仏教徒の移住があった。この移住は仏教徒人口の増加において最も現実味のある原因のひとつであった。その後も移住は続いた可能性があるが、統計の一般報告書では言及されていない。それに加え、どの統計も移民の仏教徒の数を明らかにしていない。2001 年統計は、ウツタルプラデーシュの総仏教徒数の 70%（概算）がアウトカーストからなると明記している。そこから示唆されるのは、残りの 30%（概算）がチベット移民を含む他のカースト出身の仏教徒だということである。

4.5 留保制度の拡大

1991 年以降の仏教への改宗の原因のひとつは、改宗前の指定カーストだけのものだった留保制度が、新たに改宗した者に拡大されたことである。この点は Mahendra K. Premi により立証されており、彼は次のように述べている。「議会による「宗教」に関する法の改正は数度にわたってなされてきた。例えば、いくつかの州における仏教徒数の異例の増加は、多くの指定カーストの人々が仏教に改宗し、しかも指定カーストに適用される特権を受け続けたことによるものであった」³³⁾。1991 年の仏教徒に対する「留保制度の拡大」は改宗を後押しした要因であるかもしれないが、唯一の要因ではない。なぜなら、それ以前の統計でも仏教徒数の急増が示されているからである。留保制度が唯一の要因であるならば、1991 年以前に仏教があれほど発展しなかったはずである。それもひとつの原因ではあるが、加えて、アンベードカルによるイデオロギー的な鼓舞があらゆる年代における仏教伸張の主な動因であった。

5. 仏教徒コミュニティの政治的意味

社会地位に関して現在入手できる指標の一つとして、仏教徒の「識字率」は、同コミュニティが識字率の点で指定カースト（SC）に比べてやや上位であるということを示している。とはいえ、イスラム教徒を除けば、すべての宗教コミュニティの内でも最下位である。経済面については、仏教徒は主に耕作と農業労働の割合が指定カーストよりやや高く、一方で家内産業、公務員、鉱業、建設、教員、商業などでは指定カーストの割合がかなり上回っている。実際、彼らの社会経済状態を調べるデータは充分には存在しない。政治という点では、仏教徒の発言力は、1990 年以降はかつてない高いレベルに達している。

Table 6: Buddhists Contestants in Uttar Pradesh Assembly Elections 1991-2007

Year	Total Seats	Total Contestants	Average	Buddhist Contestants			% of Buddhist Contestants
				Male	Female	Total	
1991	419	7851	--	10	03	13	0.16
1993	422	9726	23	24	01	25	0.25
1996	424	1029	02	08	00	08	0.77
2002	403	5533	14	11	03	14	0.25
2007	403	6086	15	19	04	23	0.37

Sources: Statistical Reports on General Election, 1991 - 2007 to the Legislative Assembly of Uttar Pradesh, Election Commission of India, New Delhi.

※註記： 候補者が仏教徒であるか否かは彼らの姓から判断してある。仏教徒の大半は、自分の姓をゴータム (Gautam) またはバウッッド (Bauddh) に変える。しかし、姓を変えていない仏教徒も多いため、実際の数字はこれより高い可能性がある。大衆社会党 (BSP) では多くの仏教徒リーダーが名前を変えずに選挙に立候補する³⁴⁾。

上の表は政治における仏教徒の参加と発言力を示している。1991 年以前には仏教徒の候補者はほとんどいなかったが、20 世紀の最後の 10 年間で急速な増加を見せた。それ以前には仏教徒の政治参加は無いに等しかったため、上記のデータでは 1990 年以降の発展のみを示している。

ウッタルプラデーシュの州議会議員選挙に関する統計レポートは候補者の宗教的立場に関するデータを一切公開していないが、指定カーストに関しては言及している。仏教徒の大半が指定カースト出身であることが知られているため、インド政府も彼らを指定カーストの中に含めている。

上の表から推察される結論は次のとおりである。すなわち、仏教徒候補者の割合は、1991 年の 0.16% から 2007 年の 0.37% へと増加した。1996 年に急激な増加が見られ、割合が 0.77% に達している。候補者のほとんどは無所属議員と見られる。2007 年の選挙では無所属の候補者 (09) を除くと、BSP の候補者 (05) が最も多い³⁵⁾。このように選挙戦における仏教徒の数が上昇した理由として考えられるのは、指定カーストの留保制度が仏教徒にも拡大されことであろう。

現在、BSP が支配する州では多くのアンベードカル仏教徒が州大臣に任命されている。州政府の政策・政治計画は彼らの影響を多分に受ける。仏教徒の大半は BSP の大票田であるダリットであるため、アンベードカル仏教徒の台頭は BSP にとって非常に大きな関心事である。どこかで仏教徒人口の驚異的な増加傾向があれば、それは BSP 政権の政治計画に影響を及ぼすであろう。シャカムニ・ブッダの名のもと、マーヤーワティ (Mayawati) 政権は多くのプロジェクトに着手した。中でもとりわけ重要なものはゴータム・ブッダ・ナガル (Gautam Buddha Nagar) 県のゴータム・ブッダ大学 (Gautam Buddha University) とラクナウの国際仏教研究所 (International Buddhist Research Institute: IBRI)、そしてバウッッド・ヴィハール・シャーンティ・ウパヴァン仏教寺院 (Bauddh Vihar Shanti Upavan) である。この IBRI では仏教徒の言語であるパーリ語が教えられる予定である³⁶⁾。同研究所の図書館はラクナ

ウの **Bauddh Vihar Shanti Upavan** の 1 階に置かれ、2 階には立派な仏教瞑想センターがある。その図書館には、東南アジアのさまざまな仏教国の協力を受けて、仏教に関する稀少な本が多数揃えられている³⁷⁾。

6. 結論

入手可能な統計データにもとづいた以上の調査から、仏教徒はウッタラプラデーシュにおいて最も急速に成長した宗教コミュニティであることが明らかである。アウトカースト（指定カースト）の改宗がそうした急速な成長の主たる原因である。最も決定的な要因としては、アンベードカルが多くの社会政治組織を通じてダリットに与えたイデオロギーの影響が挙げられるが、その他に、新仏教徒（**Neo-Buddhist**）への留保制度の拡大といった要因も挙げられる。このような現象にダリット率いる政党が反応するのは当然のなりゆきである³⁸⁾。現在において最も強力な政党である **BSP** は、アンベードカル仏教徒に多大な関心を向け、敏感に対応している。その他の後進諸階級（**Other Backward Castes: OBC**）出身の **BSP** のリーダーでさえ、アンベードカル仏教に関して非常に肯定的なようであり、彼らの自宅やオフィスにアンベードカル仏教の聖像を見ることができる³⁹⁾。統計に表される仏教徒の台頭は小さな現象ではあるが、実際にはそれ以上の大きな訴求力と意義を有している。

識字率の点で仏教徒が他のコミュニティを上回るという社会指標も重要な側面ではあるが、仏教徒の実際の社会的状況を知るにはそれだけでは不十分である。高等教育や衛生といった他の面における彼らの状態も知る必要がある。現在入手できる社会経済指標は、仏教徒が他の宗教に比べ、多くの分野で不十分な状態にあることを暗示している。現在入手可能な経済指標はまた何らかの結論に達するには充分ではなく、彼らの窮乏と不公平を断ち切るためには適切な調査を必要としている。彼らの経済状態を把握するためには、一人当たりの消費量や雇用率、基本的な施設・サービスの有無といった、他の決定的な指標も必要である。

ウッタラプラデーシュにおいては仏教徒は政治的領域において自身の要求を伸張させ続けているが、中央政府レベルでは、彼らの要求はさほど勢いをもってはいないようだ。マイノリティである仏教徒に対する国の無関心な姿勢は、次のような事例に明確に見受けられる。

第一に、政府機関は仏教徒に関する調査を実施していない。2005 年に全国標本調査機構（**NSSO**）は、イスラム教徒、キリスト教徒、シク教徒、ヒンドゥー教徒など多くの宗教コミュニティの社会経済状態に関するデータを発表した。が、仏教徒については何ひとつ記述しなかった。アンベードカル財団——インド政府の社会正義・エンパワーメント省（**Ministry of Social Justice and Empowerment**）に関係する独立機関でアンベードカル思想を推進することを目的として設立された——も、仏教徒に関するプログラムを何ら実施していない。仏教徒は指定カーストとは文化が異なるため、指定カーストと同じように手助けすればいいというものではない。

第二に、インドにはマイノリティの分類基準が二つある。それは宗教と言語である。仏教聖典の代表的な言語はパーリ語であるが、中央政府レベルではパーリ語を国内で奨励することを積極的に推し進めようとはしていない。

ウッタルプラデーシュ州の大衆社会党の政治的言説において、仏教徒コミュニティは非常に重視されている。仏教徒であり BSP のシンクタンクである人々は大勢いて、彼らは政府の政策・政治計画において重要な役割を担っている⁴⁰⁾。BSP 政権が州全域にアンベードカル仏教の聖像を展開し、パーリ語と仏教教育を奨励する機関を幾つか開設したことは、仏教徒からの文化的要求を考慮すれば理解できる⁴¹⁾。

総括すると、公平を推進する政策・政治計画を立てるために、仏教徒コミュニティには社会経済、政治、文化の分野における彼らの発展と、発展不足を認知するための調査とデータという点で、今以上の配慮が払われるべきである。その後、仏教徒コミュニティの力強い発展がインドを真の民主国家にする助けとなるであろう。

【註記】

* Shiv Shankar Das, Centre for Political Studies, Jawaharlal Nehru University, New Delhi.

¹⁾ Hari Narake, N. G. Kamble, Dr. M. L. Kasare, Ashok Godghate 編, *Dr. Babasaheb Ambedkar: Writing and Speeches, Govt. of Maharashtra* (abbr. BAWS), Vol. 17(3), *Dr. B.R. Ambedkar and His Egalitarian Revolution: Speeches*, by Dr. Ambedkar (Mumbai: Govt. of Maharashtra, 2003), 95 を参照のこと。これと同じような意思表示が、「カーストの崩壊」という実現しなかった彼の演説にも見出せる。この時の演説はアーリヤ・サマージの *Jat-Pat-Todak-Mandal* で述べていることになっていたが、改宗を支持する彼の「声」が牽制されたために許可されなかった。

²⁾ アンベードカルはディークシャーの儀式を改宗のために不可欠なことだと考えた。彼はある手紙の中でこう記している。「仏教に改宗したい者は必ず儀式を受けなければならない。さもなければ仏教徒と認められない」BAWS, Vol. 17(1), *Dr. B.R. Ambedkar and His Egalitarian Revolution: Struggle for Human Rights*, by Dr. Ambedkar (Mumbai: Govt. of Maharashtra, 2003), p. 430 を参照のこと。

³⁾ BAWS, Vol. 17(3), *Dr. B.R. Ambedkar and His Egalitarian Revolution: Speeches*, (Mumbai: Govt. of Maharashtra, 2003), p. 517 を参照のこと。

⁴⁾ 同書, p. 519 を参照のこと。

⁵⁾ 詳細は BAWS, Vol. 17(3), pp. 406-409 を参照のこと。

⁶⁾ D.C. Ahir, *Buddhism in India after Dr. Ambedkar (1956-2002)* (New Delhi: Blumoon Books, 2003), p. 40 を参照のこと。

⁷⁾ 同上。

⁸⁾ 1956 年 10 月 13 日の記者会見で、アンベードカルはある記者の質問に応じて、Navayana という言葉を使い、翌日それに改宗した。Navayana は一部の学者から新仏教 (Neo-Buddhism) と呼ばれるが、頭に「Neo」が付くことに反対する Navayana 信徒の間で抗議の対象となっている。David Pandyan, *Dr. B.R. Ambedkar and the Dynamics of Neo-Buddhism* (New Delhi: Gyan Pub. House, 1996), 201-202 を参照のこと。「Neo」とは「新しい」、「後の」、「形を変えて復活した」、「何かを基にしている」を意味する (Collins English Dictionary, 1998 編を参照のこと)。ここでは言語の問題を論じることが目的ではない。前に「アンベードカル」を付けるほうが、Timothy Fitzgerald が自著で用いた明快な趣旨に沿った語なのである。(例: *Ambedkar-Buddhism In Maharashtra, Contribution to Indian Sociology*, July, 1997 (31) no.2. pp. 225-251).

- ⁹⁾ Wikipedia: The Free Encyclopedia(http://en.wikipedia.org/wiki/Uttar_Pradesh), 2010 年 12 月 26 日に検索。
- ¹⁰⁾ 同上。
- ¹¹⁾ 1951 年統計で仏教徒人口がゼロとなっているのは以下の県。ゴーンダー（+バルラームプル）、バーラーバンキー、キーリー、シータープル、ウンナオ、アーザムガル、バステイー（+シッダールト・ナガルとサント・カビール・ナガル）、ミルザプル（+ソーンバドラー）、ラームプル、ピーリービート、シャージャハーンプル。
- ¹²⁾ N. Dutt and K. D. Bajpai, *Development of Buddhism in Uttar Pradesh*, (Lucknow: Publication Bureau, Government of Uttar Pradesh, 1956), pp. 308-326.
- ¹³⁾ 同上。
- ¹⁴⁾ 1951 年統計以降、行政区画の変更や新設が頻繁にあったが、ここでは検討しやすくするため 1951 年にあった行政区画のみをベースにしている。
- ¹⁵⁾ このデータは、ウッタールプラデーシュのさまざまな統計レポート・要録から得られた 1951～2001 年当時の境界に基づいて算出したものである。
- ¹⁶⁾ ウッタールプラデーシュとウッタールカンドを合わせた指定カースト人口に基づいている。
- ¹⁷⁾ ウッタールプラデーシュの指定部族（ST）の総人口の 0.1%、すなわち 107 人が仏教徒コミュニティに属する。“Uttar Pradesh Data Highlights: The Scheduled Tribes”, Census of India 2001 を参照のこと。Wikipedia (<http://en.wikipedia.org/wiki/Dalit>, 2011 年 1 月 1 日にアクセス)によると、NSSO の第 61 回 Round Survey では、インドの仏教徒コミュニティにおける SC または ST の総人口はそれぞれ 89.5%、7.4%となっている。
- ¹⁸⁾ 指定カーストから改宗した仏教徒の数が示されたウッタールプラデーシュの統計は、これが最初である。この数字は詳細な県別のかたちでは示されていないが、全体的にはそれ自体が画期的なことである。
- ¹⁹⁾ “General Report on the Census,” *census of India*, Vol. XV, Uttar Pradesh, Part I-A (ii), p 128 を参照のこと。
- ²⁰⁾ Owen M. Lynch, *The Politics of Untouchability, Social Mobility and Change in a City of India* (New York and London: Columbia University Press, 1969), 149.
- ²¹⁾ 2010 年 7 月 31 日にラクナウの Risaldar Park Baudh Vihar で直接聞き取り。
- ²²⁾ Lynch [1969] , pp 130-131.
- ²³⁾ 同上。
- ²⁴⁾ 同上。
- ²⁵⁾ 同書、pp. 127-128.
- ²⁶⁾ Lynch, O. [1972] . “Dr. B. R. Ambedkar-Myth and Charisma”. (J. M. Mahar 編) . *The Untouchables in Contemporary India*. Tucson: The University of Arizona Press. p. 107 and, Lynch 1969, pp. 140-141.
- ²⁷⁾ Fiske, A. [1972] . “Scheduled Caste Buddhist Organisations”. (J. M. Mahar 編) , *The Untouchables in Contemporary India* (pp. 112-142). Tucson: The University of Arizona Press, p. 118 を参照のこと。
- ²⁸⁾ インド共和党は留保制度におけるアウトカースト仏教徒の割当を増やすために長年奮闘していた。Lynch [1969] , p. 104 を参照のこと。

- ²⁹⁾ Maren Bellwinkel-Schempp, 2007, p. 2181, *Economic and Political Weekly* (abbr. *EPW*) .
- ³⁰⁾ Ilaiah [1994] , BSP and Caste as Ideology. *EPW*, 29(12), p. 668 を参照のこと。
- ³¹⁾ Sudha Pai, *Dalit Assertion and the Unfinished Democratic Revolution: The Bahujan Samaj Party in Uttar Pradesh - Cultural Subordination and the Dalit Challenge* Vol. 3, (New Delhi: Sage, 2002), p. 1 を参照のこと。
- ³²⁾ “General Report on the Census”; *Census of India*, Vol. XV, Uttar Pradesh, Part I-A (ii), p 128 を参照のこと。
- ³³⁾ Premi Mahendra K. *Population of India, In the Millennium: Census 2001*. (New Delhi: NBT. 2006). p. 167 を参照のこと。
- ³⁴⁾ 例として、Swami Prasad Maurya、Paras Nath Maurya、Daddu Prasad などは名前にゴータムまたはバウッドを加えていない。BSP のマヤーワティ党首も多くの儀式を仏教式に行っている。彼女は BSP 創設者のカーンシ・ラーム (Kanshiram) の葬儀を仏教的慣例に則って行った。
- ³⁵⁾ *Statistical Reports on General Election 2007*, the Legislative Assembly of Uttar Pradesh, Election Commission of India, New Delhi を参照のこと。
- ³⁶⁾ 2010 年 12 月 6 日、Bauddh Vihar Shanti Upavan にてラクナウ国際仏教研究所所長 Chandima 比丘に直接聞き取り。
- ³⁷⁾ 同上。
- ³⁸⁾ BSP の他に、インド共和党 (RPI)、インド正義党 (Indian Justice Party: IJP)、アンベードカル・サマジ党 (Ambedkar Samaj Party) など多くの政党がある。当初から RPI のリーダーらは仏教改宗に深く関わっている。IJP の党創設者でもある党首は仏教に改宗した。
- ³⁹⁾ 実際、筆者も、その他の後進諸階級出身の多くのリーダーの自宅やオフィスにアンベードカル仏教の聖像があるのを目の当たりにした。
- ⁴⁰⁾ BSP の多くのリーダーたちは、党首脳部による改宗儀式への招集を心待ちにしている。マヤーワティによる 2003 年と 2006 年の宣言によれば、彼女は、中央政府での権力を掌握した暁には、数百万の支持者たちとともに改宗儀式を受け、彼女の政府のすべてのプログラムは仏教的儀礼に従って執行されることになっている。興味深いことに、彼女は改宗儀式を受けることができなかったけれども、ラクナウの仏教寺院には彼女の像がその師カーンシ・ラームの像とともに立っている。これは明らかに彼女が仏教徒だと主張していることを象徴する。
- ⁴¹⁾ 2010 年 7 月 21 日、Gautam Buddha University, NOIDA の人文社会科学部長である Mahavir Singh 教授への直接聞き取りによると、同大学の学生全員が仏教教育の課程を履修しなければならないとの話であった。